様式３

提案趣旨説明書

〈作品タイトル〉

「アソビ」を持たせる

〈提案の趣旨〉

1988 年に誕生した三河安城駅。その後約 30 年の期間でマンションの建設など都市化が進み、住民が集まる重要地域として発展してきた。一方で、その背後に積み重ねられてきた歴史や文化などの地域性を感じ取ることができる場所は少なくなってきており、他の郊外都市との画一化が進む。農・歴史・スポーツなどをテーマとし、子供から高齢者まで幅広い世代の住民が様々な”遊び”を通して繋がることで、コミュニティの再構築を図りたい。そして「三河安城」という地域の素晴らしさを地域住民が再認識し、そこでの暮らしを楽しむと同時に、安城市が目指す都市像である、ケンサチ「市民一人ひとりが生活の豊かさとともに幸せを実感できるまち」を実現する風景の創出を提案する。
具体的には、対象地内に大きく「シェアリングファームエリア」「バスケットボールコートエリア」「親水広場」「コミュニティセンター」を区画し、これらを中心とし、住民の遊び空間と都市の余白としてのあそびを提案する。

■周辺住民のニワとなり集まる場「シェアリングファーム」

住民がシェアして利用する農園は、周辺住民の家庭菜園の場となるだけでなく、借主同士の交流を生み出す場となる。また作った農作物を販売したり、農作物を使った BBQ 大会などを実施することで、ファームの借主・対象地の利用者が食を通して地域の豊かさを感じられる機能を生み出す。

■三河安城のバスケを日常とする「バスケットコート」

3on3 の本格的なバスケットコートを整備することで、住民が日常的にバスケに触れる機会をつくりつつ、イベント時には三河シーホースによる練習会などで活用される。ボールが外へ出ることを防ぎつつ、視線の妨げにならないよう、周辺から少し低い場所にコートを整備し、荷物置き場や座って観戦できる居場所を生み出す。

■三河安城周辺の歴史と日常的に触れる「親水広場」

明治用水中井筋線の動線上に位置する親水広場は、既設の水場と合わさって都市のオアシス的役割を提供するとともに、生活を支える明治用水という社会基盤を感じさせる場となる。さらに飛び石や段差などにより水の流れを作るとともに水の流れる音を感じさせることで、通過する鉄道の音を緩和し落ち着いた空間を創出する。

■コミュニティの接点と居場所を生み出す「コミュニティセンター」

地元住民の姿が駅前に見えないのは、このエリアに居場所が少ないことを考えた。コミュニティセンターは、バスケコートやシェアリングファームの管理者が入居し、これらの活動を支援する。また地域の食を感じることのできるメニューをカフェで提供することで、五感で食を感じる体験を提供する。